

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17H02298

研究課題名(和文) 平等院鳳凰堂空間の荘厳と機能に関する総合的研究

研究課題名(英文) A Study on the Decorations and Functions of the Phoenix Hall of Byodo-in Temple

研究代表者

皿井 舞 (SARAI, MAI)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：80392546

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：平等院鳳凰堂は、平安時代後期のいわゆる国風文化の様相を具体的、総合的に知ることのできる唯一の遺構と言っても過言ではない。こうした重要遺構である鳳凰堂については、各分野の研究者によって、多くの調査・研究が積み重ねられてきた。しかしながら、鳳凰堂内の空間が「西方浄土」なのか、「来迎の様」を表しているのか、見解が分かれている状況だった。本研究では、修理時の足場を利用して、これまで確認しづらかった柱にほどこされた文様パターン等を確認し、その図像を分析することによって、あらためて『観無量寿経』にもとづく室内荘厳であったことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

平安時代の対外交流史研究が盛んになった2000年代以降、平安時代中期以降の文化、とりわけ「国風文化」をいかにとらえ直すかが大きな課題になってきた。日本独自の文化と評価されがちな文化について、前代と変わらないか、むしろそれよりも中国の影響が強いと考えられる説が新たに浮上した。そのなかにあって、もう一度基本に立ち戻り、もっとも思想があらわれやすいと考えられる空間荘嚴の文様パターンなどを確認することで、あらためて国風文化期の美術を体現している鳳凰堂荘嚴の理解を進め、日本の古典としてその後の文化の基礎をなす国風文化の形成についての議論にも一石を投じた。

研究成果の概要(英文)：It is no exaggeration to say that the Phoenix Hall of Byodo-in Temple is the only valuable relic of the mid-Heian period, that shows development of Japanese style culture totally. A lot of specialists in each field has been studying various aspects of the Phoenix Hall. However, two opinions have been presented as so far, one is that the Phoenix Hall was created as a Buddhist heaven of Amitabha and the other is that it was assumed that Amitabha and Bodhisattavas. This research focused on the paintings of columns which support the roof of the Phoenix Hall. The combination of the arabesque flower patterns and images of child who plays various instruments were founded on Amitayurdhyana Sutra.

研究分野：日本仏教美術史

キーワード：平等院鳳凰堂 空間荘嚴 観無量寿経 国風文化

1. 研究開始当初の背景

本研究は、実質的に平成元年（一九八九）より開始された現在に続く平等院鳳凰堂修理事業のなかにあつて、一定期間、鳳凰堂内に天井まで修理足場が組まれていることを利用させていただき、当時の所属機関のスタッフの専門領域と協業することにより、鳳凰堂内の主に柱絵及び天井の文様構成などのカラー画像・蛍光画像・近赤外線画像の撮影のほか、蛍光 X 線分析などを実施することで、平安時代後期のいわゆる国風文化期の最も重要な遺構の一つである鳳凰堂の絵画の詳細をひろく共有し、作品数の少ない同時期の情報を増やし、研究の進展に供する試みであった。

2. 研究の目的

本研究は、平安時代を代表する建築・絵画・彫刻・工芸の総合芸術である平等院鳳凰堂について、堂内柱絵や扉絵について光学調査を実施して各々の様式的・彩色材料に関する未解明の点を明らかにしながら、堂内全体の空間構想について理解を深めることを目的とする。また個別分散化しがちであった隣接諸分野の研究者が鳳凰堂の空間構成の機能について、帰納的に議論を深め、仏堂空間の荘厳全体の構想と機能を明らかにしようとするものである。

3. 研究の方法

方法の前提：堂内の各種荘厳については、戦前よりこれまでに多くの研究が積み重ねられ、『平等院大観』という詳細な調査報告が公刊されている。とりわけ扉絵を中心とする絵画については尽くされていると言ってもよい。ただ当時の調査では、足場がなく、天井、及び柱絵などは十分な調査がかなわなかったとみられる。すなわち来迎柱も含む堂内十本の柱絵については、いまだ調査の余地があると言えた。また彩色については、これまでも「青色」が少なく、代用群青が用いられていたのではないかという指摘がなされてきたが、これについても検討の余地が残されていた。

（1）柱と中心とする絵画資料のカラー画像、蛍光画像および近赤外線画像の撮影

堂内柱のうち、特に太陽光が届きにくい来迎柱の西側を中心にカラー画像、蛍光画像で図様を押さえ、文様パターンを明らかにし、扉絵と柱絵との関係を明らかにする。

（2）堂内の荘厳プログラムを本尊阿弥陀如来像および雲中供養菩薩像の、扉絵、柱絵を総合的に捉えることで明らかにする。

（3）同時代の中国建築の装飾プログラムと比較検討することで、その特色を明らかにする。これらを通じて、堂内荘厳プログラムを明らかにすると同時に、平安時代後期の「国風文化」の現象の潮流をあらためて明らかにできると考えた。

4. 研究成果

（1）本研究の主な成果は、これまで記録に残すことが難しかった堂内上層部の撮影がかなり、蓄積することができたことが大きな成果として挙げられる。これらは、将来的に報告書のかたちで刊行し、広く共有することを目指すものである。

(3) 従来、鳳凰堂は『観無量寿経』という浄土経を説いた經典の内容にもとづいて極楽浄土のありさまを再現したものであると考えられてきた。ところが近年、堂内の本尊阿弥陀如来像や雲中供養菩薩像などにみられる密教的な要素を重視し、それをもとに鳳凰堂内の空間を密教的な理論にもとづいて読み解く試みもなされている。密教的な要素を大きく評価して、堂内空間の意味を読み解くことが妥当なのかどうか、その当否を考えるために鳳凰堂の柱の装飾が鍵となると考えられた。鳳凰堂の空間構成の典拠を考えるヒントとして、まず、扉画の「九品来迎図」があげられる。「九品来迎図」の典拠である『観無量寿経』には、来迎には全部で九つのランクがあると記されており、鳳凰堂の扉絵、壁画でもそれに基づいて描かれている。各来迎には差があるが、平等院の場合いずれもが最上級ランクの「上品上生」に描かれている。

ここで興味深いのは、密教的な立場から極楽往生を目指すための方法が解説された『無量寿如来根本供養儀軌』によると、真言陀羅尼を読むことと、印を結ぶという行法を順に行うことによって、罪が消え、悟りの境地に達し、最上位ランクの「上品上生」で極楽浄土に行けることが確約されている。そして、この儀軌による観想を通じて得られた極楽浄土の描写をするにあたっては、基本的には『観無量寿経』を含む浄土三部経が典拠となっていることがわかる。

これらをふまえた上で、柱絵に注目すると、童子がもつ楽器が饒という小さなシンバルみたいな楽器か、白板と鼓の打楽器、舞踊菩薩が一軀か二軀かという違いはあるものの、いずれも楽器をもつ童子と菩薩、踊る菩薩と鳳凰とが組み合わせられた図容であることがわかる。各モチーフの背後の地の部分には、宝相華唐草の植物文様で満たされている。なお堂内十本の柱は、柱ごとに絵の筆致が異なり、描き手がいくつかに分かれることがわかる。分業体制を復元的に考えるうえでも重要な資料である。

ところで、堂内荘嚴プログラムを理解するうえで、この柱絵様帯の図容のうち注目すべきモチーフは童子である。浄土三部経のうち、童子は『観無量寿経』にしか現れないことは、堂内の荘嚴が『観無量寿経』を典拠としていることを示唆するものである。それと同時に、童子は浄土を観想する十六通りの方法のうち、第四観の樹想に現れることが知られる。浄土に生え出る宝樹は、七宝のように色鮮やかな葉をつけて、樹上は妙なる真珠でおおわれるという情景が想像され、また宮殿があり天童子がそのなかにあるという描写がある。実際の堂内柱は宝相華唐草模様で覆いつくされており、柱という形状からしてまさに樹木を想起させる。厳密にテキストと一致するわけではないが、浄土の情景に関する共通のイメージが存在したことを推測させるものである。

また柱に描かれる舞踊菩薩は、奈良時代以来の伝統をもつ浄土曼荼羅の舞楽壇にあらわれる舞踊菩薩の姿に非常によく似ている。奈良時代以来の典型的な浄土図には阿弥陀如来の前方、蓮池の上にもうけられた舞楽壇に二人一組で踊る菩薩が見て取れる。こちらは二菩薩ともに片方の足を少し曲げながら、片方の手を挙げて天衣をはためかせる舞の様は、平等院の舞踊菩薩のモチーフが伝統的な浄土図の図容を受け継いでいることを示唆するものである。特に、二人一組での舞は「巾舞」と言われており、中国では盛唐期まで盛んに描かれていたことが指摘されている。平等院の舞踊菩薩のモチーフは、雲中供養菩薩像にも見られるが、こうした日本の奈良時代の絵画の伝統にならったものであったことが理解されるだろう。

すなわち柱絵の文様構成は、『観無量寿経』において浄土を観想する十六観のうちの第四観樹想観に着想得ており、奈良時代以来の伝統的な浄土図のモチーフを借りて再構成したものであることがうかがえる。

以上の柱絵に関する部分をまとめると、柱絵の文様構成は、『観無量寿経』に基づいている

可能性が高く、極楽浄土の情景をあらわすことを意図したものであった可能性が高いと指摘することができる。

(4) 上記の空間構成の考察から派生する重要なポイントは、近年の「国風文化論」にも一石を投じるものである。すなわち、あらゆる贅を凝らしてつくられた国風文化期を代表する鳳凰堂において、その図容選択が日本の奈良時代以来の伝統に基づくものである点である。

近年、平安時代の対外交流史研究が盛んになった 2000 年代以降、平安時代中期以降の文化、とりわけ「国風文化」をいかにとらえ直すかが大きな課題になってきた。日本独自の文化と評価されがちな文化について、前代と変わらないか、むしろそれよりも中国の影響が強いと考えられる説が新たに浮上した。

しかしながら、上記のように図容に伝統的なモチーフが用いられていること、同時代中国で皇帝の命で編纂された『营造法式』の彩画作を確認してみても、日本がその影響を受けた様子は見当たらないことなどに鑑みると、国風文化の成立に同時代中国文化の大きな影響を認める近年の説は当たらないのではないだろうか。

今後の展望

当初の目標として堂内の工芸遺品と絵画、彫刻の関係について、十分に考察が深められていない点があげられる。堂内の彩色基調については、柱・扉絵のみならず、彫刻、天蓋、須弥壇などの相互関連性も視野にいれるべきだと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 皿井舞・城野誠治・早川泰弘	4. 巻 13
2. 論文標題 平等院鳳凰堂東面中央扉「上品上生図」の彩色に関する科学調査	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 鳳翔学叢	6. 最初と最後の頁 211-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 皿井舞
2. 発表標題 平安時代前期の「所」と造像
3. 学会等名 研究発表と座談会 仏師とその工房をめぐる諸問題
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 皿井舞
2. 発表標題 平安時代における和様彫刻の成立について
3. 学会等名 International Conference: Constructing Identity. The Patterns of Japanese Culture (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 皿井舞
2. 発表標題 The Style and Techniques of Dry Lacquer Sculptures in Japan: The Latest Scientific Report About the Seated Senju Kannon Bosatsu of Fujiidera
3. 学会等名 Sixth Forbes Symposium at the Freer Gallery of Art (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 東京国立博物館・東京文化財研究所	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ライブアートブックス	5. 総ページ数 264
3. 書名 国宝平安仏画光学調査報告書	

1. 著者名 東京国立博物館・東京文化財研究所	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ライブアートブックス	5. 総ページ数 264
3. 書名 国宝平安仏画 光学調査報告書	

1. 著者名 増記隆介、皿井舞、佐々木守俊	4. 発行年 2018年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 236
3. 書名 天皇の美術史1 古代国家と仏教美術	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	塚本 磨充 (Tsukamoto Maromitsu) (00416265)	東京大学・東洋文化研究所・教授 (12601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	神居 文彰 (Kamii Monsho) (10411117)	佛教大学・公私立大学の部局等・非常勤講師 (34314)	
研究分担者	早川 泰弘 (Hayakawa Yasuhiro) (20290869)	独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・保存科学研究センター・部長等 (82620)	
研究分担者	城野 誠治 (Shirono Seiji) (70470028)	独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化財情報資料部・専門職員 (82620)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関